

週刊センターニュース No.99

第 99 号 (2006 年 3 月 6 日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm



提案: 課外活動成果発表の場として大学祭を見直す - 『平成 16 年度学習・研究環境改善のための学生生活調査』分析結果報告 -

2 月 10 日に開催された平成 17 年度第 10 回教育企画会議では、課外活動団体の顧問教員のあり方について、学生生活部会で検討し鹿野教育担当理事による修正を経た案が承認された。その内容については各部局の教授会等で報告されることと思う。毎年開催されている顧問教員会議において交わされた種々の意見を受けてのものである。これまで曖昧であった顧問の位置づけについて、一定の指針となるものであり、ご確認いただきたい。

さて、本学は中期計画において、「課外活動団体顧問教員の会議開催、課外活動成果発表の場の積極的な提供、ボランティア窓口の設置等により、課外学習の支援を行う」としている。課外活動についての明確な支援をうたったものである。本学における学生の課外活動に関する実情はどのようなものであるか、学生生活調査の回答から確認してみる。

未公認を含めて、いわゆる学内サークルに(調査時点で)加入している学生は、54.7%となっている。平成 6 年度調査の 57.8% に始まり、55.6% (8 年度)、53.0% (12 年度) となっており、55% 前後の学生が何らかの課外活動サークルに入っているという状況に顕著な変化は見られない。この数字が全国的にみて多いか少ないのかは即断できない。当センター所蔵資料からは、

名古屋大学の『学生生活状況調査報告書』(平成 13 年 10 月)では、学内サークルへの加入率が 46.2% であること、浜島幸司「新興大学の部・サークル活動」武内清編『学生のキャンパスライフの実証的研究』(平成 17 年 5 月)では、<伝統総合大学と中堅大学を併せた 12 大学のサークル加入率が 68.6% である> ことなどが分かるくらいである。

学生たちには、別項目で大学生活に対する満足度を問うており、満足・不満と感じている要因について(複数回答可、三つまで)尋ねているが、満足している要因として 31% の学生が「友人がいるので楽しい」と答え、次に多いのが「サークルに魅力がある」12% であり、第三位の「授業内容が理解でき面白い」7% を越えている。教員としては、5 時限めのゼミを延長しようとして「サークルがあるので帰ります」という学生がいると、議論を続けるよりもサークルのほうが楽しいのだということをお願いしてしまう。ともあれ、大学のキャンパスに課外活動する学生たちの姿がなければ、大学らしさを感じることは出来ないであろう。

学生募集の観点から、私学のようにスポーツ特待生を設けることの是非は別として、箱根駅伝や大学ラグビーなどで活躍する運動部の存在は、研究者を目指して大学を希望するわけではない圧倒的多くの受験生たちには魅力的であろう。運動部の応援にかけつける一般学生たちにとっても、自らの大学のアイデンティティを確認し、その大学の学生であることを誇りに思うようになる。サークルのみというわけではないが、サークル抜きでは大学生活を語れないという学生たちが今も昔も、大学の大学らしさを支えてきたといえる。

本学の「学生の表彰に関する申合せ」において、「学業・卒業論文等の成果が優れていると認められる者」や「社会活動において優れた評価を受け、かつ、本学の名誉を著しく高めたと認められる個人又は団体」と並んで、「全国的又はそれ以上の規模で開催される競技会又はコンクール等で優れた評価を得る等、本学の課外活動の振興に顕著な功績があったと認められる個人又は

団体」が学長による表彰の対象となっていることは当然であり、これまでMJS（ジャズサークル）や合唱団、剣道部などが表彰されてきた。

学生生活調査では、学生たちからの「サークル棟が狭い」「音楽系サークルの活動のための施設を」といった要望が数多く寄せられている。今年度の学長裁量経費によって、主としてアメリカンフットボール部が使っているグラウンドでの夜間照明がようやく整えられた。同部の加藤公基選手（工学部4年生）がNFLヨーロッパの特別強化選手に選ばれたことなどが評価されたものであろうが、日が暮れてからも練習したいという学生たちの声に、一施設だけとはいえ、大学が答えたことは評価されるべきだろう。

近年、教育中心へさらには学生視点への大学改革が強調され、授業評価等を中心とした授業の改善に力点が置かれてきた。これに対し、サークル＝課外活動は高等教育研究の対象となつてこなかった。実は、学生支援関係の研修に参加すると、どの大学でも課外活動の低迷、大学祭の活気のなさには、頭を痛めている。当センターでは、角間ランチョンセミナーの開催を通じて、学生たちに課外活動成果発表の場を提供してきた。アカペラ、マンドリン、ジャグリング等のサークルが、30分という短い時間ではあるが、学生たちの前でパフォーマンスに努めてくれた。こうした日常的な成果発表も重要である。だが一方で、大学祭という学外者向けの舞台を機能させることも考えねばならない。

学生生活調査によると、平成16年度の金大祭に参加した学生は30.7%となっている。参加学生たちで「参加してよかった」と答えた学生は半数である。また、「帰省または旅行の計画を立てた」（26%）、「アルバイトの予定を入れた」（10%）との回答もある。私は、顧問を務める二つのサークルの活動振りを確かめる目的もあり、角間での大学祭に毎年参加してきたが、個人的には（街中にないという決定的要因はあるにしても）全体として盛り上がり欠けるとの感を抱き続けてきている。学生たちの自主的な企画によって行われる大学祭であることが原点である。もっと多くの学生や市民を呼びたいと考えるならば、アイデアは学生たち自身が出すべきであることは言うまでもない。ただし、金大祭と同時に行われている、理学部の教員・学生たち有志による「ふれてサイエンス」は、多くの市民・子どもたちでにぎわっている。オープンキャンパスとしては理想的な形になっており、こうした形で大学が側面から大学祭を盛り上げることが、一部の教員たちにある＜休講してまでやる必要があるのか＞という意見を払拭することにつながると思う。

ちなみに、当センターの客員研究員を引き受けてもらっている小島佐恵子氏（早稲田大学）は、昨年京都大学で開催された「大学教育学会第27回大会」で「近年の私立大学における学生支援の動向」と題して報告された。多様化する学生の現実に対応した支援が必要であることを、詳細なデータ分析によって試みた意欲的な研究成果報告であった。今後は、小島氏にも意見をいただきながら、当センターの「教育成果公開」や「学生支援」のプロジェクトにおいて検討し、課外活動活性化のための提案をしていきたい。

なお、平成16年9月、教育企画会議学生生活部会は、課外学習の支援について検討するため、全教職員に対して課外活動等に関する諸問題についての意見集約を行った。そのさいにお寄せいただいた意見に対しては、実施済み事項について、ホームページ（学内専用）にてすでに広報済みであることを付け加えておく。

学生の声に応えるための提案その2、＜大学は、オープンキャンパスの同時開催などの方法を講じることによって、大学祭を課外活動成果発表の場として機能させるべく努力すべきである＞（文責 教育支援システム研究部門 青野 透）